

4)春まき小麦「ハルユタカ」の施肥法

北見農業試験場 土壤肥料科

1.試験のねらい

春まき小麦「ハルユタカ」は、昭和60年に優良品種となり、普及に移された。

本品種は、短強程で、耐倒伏性、耐肥性が強いとされており、本品種の特性を、充分発揮させるための施肥法について検討した。

2.試験方法

「ハルユタカ」に対する窒素、りん酸の施用量と子実収量との関係を明らかにするため試験を行った。

3.試験結果

1)「ハルユタカ」の目標収量は10a当り350~450kgとし、その場合の窒素吸収量は10~18kg/10a程度である。したがって、施肥窒素量は10a当り10kg程度が必要である(図-1及び図-2)。

なお、窒素施用量は土壤の窒素肥沃度及び気象条件によって影響を受けるので、窒素肥沃度と倒伏の危険性を考慮して減肥あるいは増肥が必要である。

2)「ハルユタカ」は、窒素追肥の効果が低いので、全量基肥で施用すべきと考える(表1)。

3)施肥りん酸量は15kg/10a程度とし(図-3)、カリは10kg/10a程度施用する。なお、土壤の有効態りん酸含量は現行基準値の高い側(20~30mg/100g)が適当と思われる(図-4)。

4)「ハルユタカ」は窒素、りん酸の増肥で多収が得られたが、多収の要因としては窒素では穂数の著しい増加、りん酸では穂数および粒重の増加があげられる(図-5)。

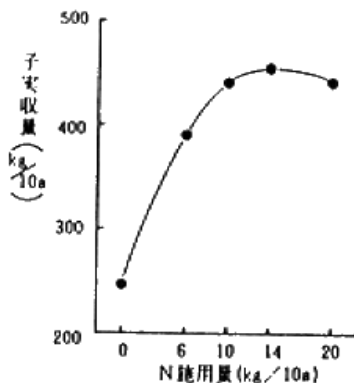


図1.窒素施肥反応(S,57~61年)

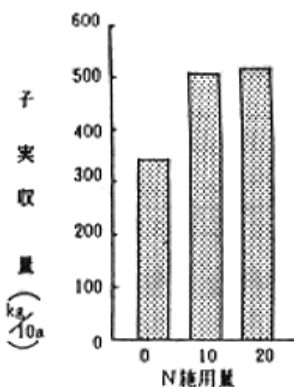


図2.窒素施肥反応(S,61年、佐呂間町)

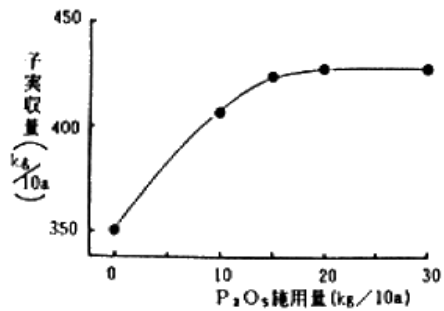


図3.りん酸施肥反応(S,58~61年)

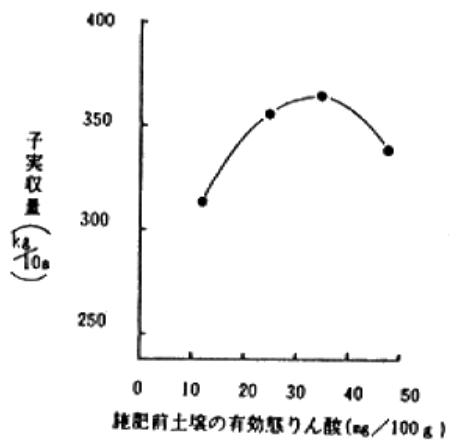


図4.土壌のりん酸肥沃度と収量の関係

表1.ハルユタカに対する窒素追肥の効果(無追肥区100に対する比)

窒素追肥	試験地					秋まき小麦 (ホロシリコムギ)
	斜里	網走	端野	訓子府	平均	
①無追肥区	100	100	100	100	100	100
②幼穂形成期追肥区	101	107	100	105	103	121(起生期)
③止葉期 "	-	90	104	101	98	125
④出穂期 "	99	94	100	102	99	106

(注)基肥:N8kg/10a、追肥:N4kg/10a

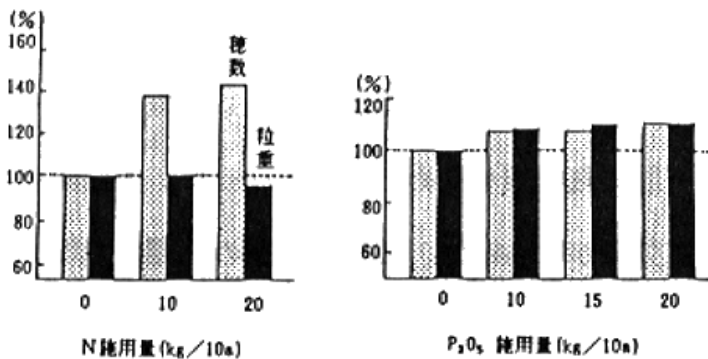


図5.窒素、りん酸施用量と穂数、粒重の関係

注)有効態りん酸の土壌診断基準値:10~30mg/100g土(トルオーグ法)